

「待ち人此処に在らず」

『待ち人此処に在らず』

登場人物

駅員……………この場所を記録し続ける者。

清掃員……………無言で床を掃く者。

謎の少女……………胸に鍵を提げた若い女性。

女……………かつて待ち続けた人。

スーツの男……………盲目な来訪者。

あらすじ

風だけが通る、電車の来ない駅のホーム。

ひとつのベンチに、五人の人々が集まる。

誰を。何を待っているのか。

風と沈黙だけが、ゆっくりと会話を続けていく――。

「ここに座れば、あなたも“誰か”を待ち始める。」

第一場 風の掃除

舞台中央に、古びたベンチが一脚。床は灰色、ややくすんだ質感。背景には、線路のような影が照明で書かれている。開演の合図なしに、照明がゆっくりと浮かぶ。音はない。風も、まだ吹かない。観客の呼吸が整うまで、沈黙。――ゆっくりと、清掃員が現れる。古びたモップを押して、ホームを歩く。ゴト……ゴト……。モップの先が乾いていて、音だけが響く。

（無音）

清掃員、バケツの水を絞る。その音が、ようやく“風の代わり”になる。やや離れた場所から、駅員が現れる。制帽を整え、掲示板の前に立つ。

駅員「……おはようございます。今日も、変わりませんね。」

（間。モップの音が返答のように続く。）

清掃員「変わらないのが、いちばん汚れるんですよ。」

（短い沈黙。清掃員、ベンチの脚を拭く。駅員、人差し指を舐め、立てる。）

駅員「風が、少し弱いですね。」

清掃員「眠ってるだけです。夜になったら、また通ります。」

（風が微かに通る。ヒュー……。観客席にもかすかな風が吹くように感じさせる。）

駅員「風に、名前があると思いますか？」

清掃員「ああ。でも、呼んだら逃げてしまう。風ってのは、呼ばれないうちが名前なのです。」

（沈黙。モップの音が止む。）

駅員「……誰も来ませんね。」

清掃員「あんた、まだ“来る”と思ってらっしゃるんですか。」

駅員「“来ない”と決めると、仕事がなくなるんです。」

清掃員「仕事のために信じるなんて、ご立派だ。」

駅員「あなたも同じでしょう。誰も歩かないホームを、毎日拭いて。」

清掃員「ええ。でもね、埃ってのは、誰かの足跡みたいなもんですよ。見えなくても、ある。だから、拭かなきゃならない。」

（モップを静かに滑らせる音。その音に合わせて、照明がわずかに揺れる。）

清掃員「止まったら、思い出すんです。あの頃、あんたもよく笛を吹いたように。」

駅員「ええ……。誰かが来る合図だと思って。」

清掃員「来たんですか？」

駅員「何がですか？」

清掃員「その誰かが」

駅員「さあ。あの音、どこまで届いたんでしょね。」

（沈黙。風が戻る。紙切れが一枚、舞台を横切る。ヒュー……。清掃員、目で追う。駅員も同時に動きを止める。）

駅員「……いま、誰か通りました？」

清掃員「風ですよ。」

駅員「風にしては、重かった。」

清掃員「重たい風もあります。待ちくたびた人の分だけ、ね。」

（沈黙。モップを置き、清掃員はベンチに腰かける。）

駅員「座るんですか。」

清掃員「座ると、水平が分かるんですよ。この駅が、まだ地面にあるってことが。」

駅員「地面から浮いてる気が、するんですか？」

清掃員「ええ。最近、風の方が重く感じる。」

（沈黙。遠くで、金属音。鍵のような、列車のような音。チリーン……。）

駅員「……また鳴りましたね。」

清掃員「風が何かを引っかけてるんでしょう。」

駅員「何か？」

清掃員「“何か”が分からないうちは、まだ大丈夫だ。」

駅員「もし、それが“誰か”だったら。」

清掃員「それでも、掃除はします。風を拭かないと、顔が曇る。」

（間。清掃員が再び立ち上がり、モップを動かす。動作はゆっくりと儀式的なよう。）

駅員「……今日も、ご苦勞様です。」

清掃員「ええ。今日も、何も汚れてませんでしたよ。」

（モップの水滴が床に落ちる音。ポチャーン……。）

第二場 記憶の残響

ベンチひとつ。空気がわずかに揺らぎ、舞台の奥でかすかな音がする。時間が、何かを待っている。少女が現れる。灰色のパーカー。白いスニーカー。首から小さな鍵。手の中にはスマホ。画面の光だけが顔を照らしている。

少女「……まだ、既読にならない。」

（静寂。指先の動く音。カタカタ……。）

少女「電波、届かないのかな。」

（間。遠くで小さな音。線路のきしむような響き。キーン……。）

少女「……ねえ。どうして、来ないの。」

（応える声はない。鍵が胸元でかすかに鳴る。チリーン……。）

少女「もうずっとここにいます。“帰る”って、言っただよ。あの人はいつも、そう言ってた。『すぐ戻るから』って。……ねえ、すぐって、どのくらい？」

（ベンチに座り、靴のつま先で床をなぞる。その線が、細い鉄の道のように残る。）

少女「ここで合ってるよね。あの人、ちゃんと見つけられるかな。」

（沈黙。空気が一度止まる。遠くから、微かな衣擦れの音。女が現れる。黒いコート。目の奥に、長い時間を抱えた表情。）

女「……そこ、座っていい？」

少女「うん。」

（女、ベンチの端に腰を下ろす。少女はまだスマホを握っている。）

女「ここ、電波わるいよ。」

少女「知ってる。でも、繋がる気がするの。」

女「気がするだけでも、充分ね。」

（沈黙。）

女「あなた、誰かを待ってるの？」

少女「待ってるというより、“来る”って言われたから。」

女「それ、ずいぶん前のこと？」

少女「“前”ってどのくらい？」

女「そうね……思い出せないくらい前のこと。」

（短い間。）

少女「あの人、来ると思う？」

女「来る人は来る。来ない人も、来る。」

少女「……変なの。」

女「ええ。でも、ここにいと、そう思えてくるの。……それ、何？」

（沈黙。少女、首の鍵を指でつまむ。）

少女「持つてると安心するの。これね、借りたの。返さなきゃいけないんだよ、本当は。」

女「そのカギで何を開けるの？」

少女「わからない。わかったら、もう“ここ”じゃなくなる気がする。」

（女、少女の手の中の鍵を見つめる。）

女「そう。“ここ”を離れたくないのね。」

少女「うん。ここは、静かだから。」

（間。空気が通り抜けるような気配。ヒュー……。少女がそれを目で追う。）

女「……あなた、目がいいのね。」

少女「見えるよ。見えないものほど、よく見えるの。」

（女、微笑む。）

女「私も、昔はそうだった。見えないものばかり、信じてた。」

少女「今は？」

女「今は……信じるより、思い出す方が楽なの。」

少女「思い出すって、どんな感じ？」

女「胸の奥で、小さな鈴が鳴るような。」

少女「これみたい？」

（鍵を鳴らす。澄んだ音。チリーン……チリーン……。ふたり、静かにそれを聴く。）

女「そう。そんな音だった……昔、誰かが同じ音を持っていた気がするの。」

少女「誰か……？」

女「はつきり思い出せないの。手の形だけ覚えてる。細くて、でも温かい手。あの人は、鍵を鳴らさずに、“握りしめる”ほうの人だった。」

少女「その人を……待つてたの？」

女「待つていたのか、探していたのか……それすらもう曖昧ね。ある日、急に手を離されて、それっきり、どっちが離れたのか分からないくなったの。」

（少女、そっと自分の胸の鍵を見つめる。）

少女「手を離されたら……寂しいね。」

女「ええ。でも、それより怖いのは——“離れたのが自分のほうだったんじゃないか”と思う瞬間。」

（少し長い沈黙。風の気配が、ふたりの間をかすめる。）

女「名前も、声も、顔も……思おうとすると逃げていくの。でもね、音だけは逃げなかった。この駅に來ると、ずっと耳の奥で、鍵の鳴るような気配がするのよ。」

少女「だから……ここにいるの？」

女「ええ。“來ない”と知りながら、“來なかった人の気配”だけは、まだこの風の中に混じってるんじゃないかって……そんな気がして。」

（女は少し笑う。）

女「もう待つのはやめたはずなのに、待たないことを決めた記憶のほうがいい、まだわたしを離してくれないの。」

（少女、そっと隣に座り直す。音はないが、距離がわずかに縮まる。）

少女「ねえ……その人の手、まだあったかい気がする？」

女「——ええ。いま少しだけ、あの頃の温度が戻った気がする。あなたの鍵の音のせいね。」

（沈黙）

少女「……ねえ。わたしにも、そういう“手”があった気がする。」

女「手？」

少女「うん。誰かの手。あったかくて……でも、指先だけがすごく冷たかった。」

（少女、自分の手のひらをじっと見つめる。）

少女「どうしてだろ。その人の手、いつも冷たくて……離れたくなかったのに、わたし……指をほどこいちゃった気がする。」

女「指を……？」

少女「うん……その日、風が強くて……でも、風のせいじゃないって分かっている。“離れたのは自分だ”って、どこかで分かっているの。」

（少しの沈黙。）

少女「でもね。その人がどんな顔だったのか、どんな声だったのか——思い出そうとすると、鍵の音みたい、すぐ逃げちゃうの。」

（少女、胸元の鍵をつまむ。）

少女「……わたし、あの人に“來る”って言われた気がするの。でも、それがいつだったのか、どこで言われたのか、何度思い出しても……全部、風の中の音みたいで、つかめない。」

女「思い出せないことは、忘れたことと違うわ。」

少女「じゃあ……わたし、忘れてないのかな。」

女「ええ。“もうすぐ思い出しそうな人”ほど、いちばん心の近くに
いるのよ。」

（少女、静かに息を吸う。）

少女「……思い出しそう。すぐ、すぐそこまで来てる気がする。でも
……どうしても、出てこないの。」

女「今じゃなくても大丈夫よ。思い出す順番は、いつだって“温もり”
からよ。」

少女「……温もり。」

（少女、胸の鍵をそっと握り、目を閉じる。）

少女「いま、少しあったかい。たぶん……その人のこと、ちゃんとまだ
……どこかで、待ってるんだと思う。」

（沈黙。二人の姿は空気に溶けていく。）

少女「……さっきの話、あなたの胸のどこかと、少しだけ繋がった気がす
る。」

女「ええ。誰かを待つ気持ちは、不思議と似るものなのよ。年も、時間
も、理由も違っていても。」

少女「わたし……待つのって、こんなに“ひとり”だと思わなかった。」

女「ひとりよ。でもね、“ひとりで待っている人が世界に自分以外にも
いる”って知るだけで……そのひとは、少しだけ形を変える。」

少女「どんな形？」

女「そうね。影に似てるもの。重なったり、離れたりしながら……でも決
して消えない形。」

（少女、ゆっくりと女を見る。）

少女「あなたの影、あったかいね。」

女「あなたの影もよ。若い影は風に軽く揺れるけれど……その揺れ方が
とても綺麗。」

（少女、少し微笑む。）

少女「ねえ……わたしもいつか、誰かの“あったかい影”になれるかな。」

女「なれるわ。影はね、待つことで、ゆっくり育つの。」

少女「育つ……？」

女「ええ。誰かの帰り道を照らす灯りみたいに。」

少女「……ありがとう。話してくれて。」

女「こちらこそ。あなたと話すと、“待たないと決めたはずの私”が、少
しだけ揺れるの。」

少女「揺れてる？」

女「ええ。それは悪いことじゃないわ。揺れた影ほど、いい影になるも
の。」

（少女、そっと笑う。照明が二人の姿をやわらかく包む。）

女「……少し座りましょう。ここは風が落ち着いてる。」

少女「うん。もう少しだけ、このままで。」

（ふたり、並んでベンチに座る。静かな沈黙。）

第三場 鍵の所在

同じベンチ。舞台は少しだけ暗い。空気に重さがある。少女と女が並んで座っている。二人の間には、まだ小さな距離。遠くから、規則的な靴音が近づいてくる。一定のリズム。コト……コト……。まるで、自分の居場所を確かめながら歩いてくるように。少女が顔を上げる。

少女「誰か来る。」

女「……ここには、もう誰も来ないはずよ。」

少女「“はず”って、どこで決まるの？」

（沈黙。靴音が止む。）

スーツの男が現れる。サングラス、白杖。だが歩き方は迷いが無い。彼は立ち止まり、まっすぐベンチの方を向く。

スーツの男「……すみません。ここ、駅ですよね。」

女「ええ。駅です。けれど——来ないわよ。」

スーツの男「電車、来ないんですか。」

少女「来ないよ。」

スーツの男「どうして分かるんです。」

少女「待ってるから。」

スーツの男「……それは、答えになってない。」

少女「あなたの質問も、そうだよ。」

（短い沈黙。男は微かに笑う。）

男「確かに。」

（杖で床を叩く。カッ……カッ……。乾いた音。）

男「音が返ってこない。」

女「ここは、そういう場所なんです。音も、言葉も、自分のもとへは戻ってこない。」

男「不便ですね。」

女「ええ。でも、静かです。」

（少女、男を見つめる。その視線に、少し戸惑いのようなものがある。）

少女「あなた、見えてるでしょ。」

（間。）

男「……どうしてそう思う。」

少女「目を閉じてる人の足音じゃないもの。」

男「なるほど。あなたには足音でわかるのですね。」

少女「足音にも形はあるんだよ。その人がどこから来たか、少しだけわかるよ。」

男「ほお……では、私の足音はどう聞こえましたか。」

少女「……“来なかった場所へ戻ろうとする人”。そんな感じ。」

男「……それは、戻るべき場所を忘れてしまった人の足音でしょうか。」

少女「違うよ。“忘れたんじゃないくて、思い出すのが怖い人”の足音。」

（男、息が浅くなる。）

男「……怖い、か。」

少女「うん。来るはずだった道を避けた人の歩き方は、どこかでいつも、

“戻り方”を探してる。」

（沈黙。）

女（男の沈黙を見つめながら）「……あなた、いまでも探しているのね。」

男（かすかに震えた声で）「探しているのかもしれませんが。……あの静ま

り返ったホームの、気配を。」

女「……過去の話？」

男「ええ。あの列車に乗らなかった日のこと。」

（沈黙。遠くで金属音。誰かの記憶が軋むような音。キーン……キーン……

……。）

女「あなたも、ここに来たのね。」

男「来たのか、戻ったのか。それももう、分からない。」

（少女、首の鍵を指で鳴らす。チリーン……）

少女「この音、聞こえる？」

男「小さな鈴の音みたいだ。」

少女「これ、“待つ扉”なの。」

男「扉……どこにある？」

少女「たぶん、あなたの中。」

（沈黙。）

男「開けたら、何がある？」

少女「さあ……来なかった人が、来るかも。」

（男、白杖をゆっくりと下ろす。）

男「そんな簡単に。」

少女「簡単じゃない。でも、開けなければ、ずっと“待ってる人”のま

ま。」

女「……あなたが、待たれていたのね。」

男「それを見たんです。“来る”と言ったのに、誰かがここで、ひとり座っていた。」

（沈黙。少女、立ち上がる。）

少女「じゃあ、もう開けてもいいよ。」

（女、息をのむ。）

男「その鍵で、何を開ける？」

少女「“来ない時間”。」

（少女、胸の鍵をそっと外す。音がひとつ、澄んで響く。チリーン……。その瞬間、照明がわずかに変わる。男の表情が、何かを見ているように動く。）

男「……見える。」

女「何が？」

男「座っていた人。たぶん、あなた。」

（女、ゆっくりと顔を伏せる。）

女「私は、もう待ってないのよ。」

男「それでも、ここにいます。」

女「ええ。“待たない”ってことを、待ってるのかもしれない。」

（沈黙。少女は二人を見つめ、手の中の鍵をそっと置く。）

（鍵が床で静かに転がる。）

少女「どちらが持っても、同じことだよ。」

（女、鍵を拾い上げる。）

女「重いわね。」

男「それは、言葉の重さです。」

（少女、目を閉じる。わずかな空気の動き。ゆっくりと薄れていく。）

女「……あれ？あの子は？」

男「どこかへ“行った”だけです。」

（女、胸に鍵を握りしめる。長い沈黙。遠くで列車の汽笛のような響きがあるが、何も通らない。ファーン……。）

女「……行った、だけ……ね。」

男「ええ。行く人は、消えたりしません。“ここじゃない場所”へ移っただけ。」

（沈黙。女は少女が立っていたあたりの空白を、そっと目で追う。）

女「まるで……風が形を持っていた場所だけが、ぽっかり残ったみたい。」

男「人が残す“跡”は、姿より確かです。それが影の仕事ですから。」

（女、手の中の鍵を見つめる。）

女「この鍵……あの子の体温が、まだ残ってる。冷たくない……。」

男「その温度は、あなたが“まだ誰かを迎える準備がある”証です。」

女「迎える……？わたしに、まだそんな場所が？」

男「あります。心が閉じていたら、鍵は重くならない。いま、あなたの手のひらで……少し震えたでしょう？」

（女、驚いたように指先を見つめる。）

女「……確かに。ほんの少しだけ、揺れた……。」

男「それは“誰か”が、あなたの名前を呼んだ記憶がまだ消えていないからです。」

（沈黙。女は鍵を胸に寄せる。その仕草は、祈りにも拒絶にも見える。）

女「……あの子、もう来ないのね。」

男「来る人は、必ず行ってしまう。」

女「行った先を、見たことある？」

男「ない。見ようとしなかった。」

（短い沈黙。女がベンチに腰を下ろす。）

女「あなた、本当は見えてるんでしょう。」

（間。）

男「ええ。見えるのに、見ないようにしました。」

女「どうして？」

男「見えると、戻れなくなるんです。あの日もそうでした。」

女「あの日？」

男「ホームに、ひとりの女性が座っていた。誰かを待っていた。私は——その姿を見てしまった。」

（沈黙。女の指が微かに震える。）

女「それが、私？」

男「かもしれない。」

（間。）

女「どうして話しかなかったの？」

男「その時、列車が来た。光だけがすごく眩しくて、あなたの顔が見えなくなった。」

女「そして、あなたは乗らなかった。」

男「ええ。誰かが降りてくる気がしたんです。」

女「誰か？」

男「“待ってる人”が。あなたが待っていた人かもしれない。」

（沈黙。二人の間の空気がゆっくりと動く）

（男は鍵を拾い上げ、掌にのせる。）

女「その鍵……あなた、見たことがある？」

男（少し間を置き）「……“あつた” 氣がします。」

女「氣が、する？」

男「覚えているわけじゃない。でも、懐かしい重さだ。」

（女、ゆっくりと男に近づく。近づき切らない距離まで。）

女「私たち、どこかで会ってる？」

（沈黙。男は答えない。答えられない。）

男「……誰かを待つ人の姿は、みんな似ているんです。」

女「似ているだけ？」

男「ええ。でも、似ているということは——どこかで、同じ時間を見ていたということですよ。」

（女、息を吸う。微かに震えた声。）

女「あなた、あの時……私を見て、何も言わなかった。」

男「言っていたら、あなた、立ち上がってしまったでしょう。」

女「立ち上がって、どうなっていた？」

男「行ってしまっていた。」

（女、静かに目を閉じる。）

女「行くのが怖かったんじゃないかって……“残らない” ことが怖かったの。」

男「だから、残った。」

女「あなたは？」

男「私は——『誰かが帰ってくるかもしれない場所』にいないければならなかった。」

（沈黙。二人は、互いの輪郭に触れるか触れないかの距離で見つめる。）

女「ねえ……私たちは、同じ人を待っていたのかもしれない。」

男（微かに笑うように）「待っていた“人”は、いつも姿を持たない。」

女「じゃあ、待っていたのは——“自分”？」

男「そう。“自分が帰ってくる”のを待っていた。」

（長い静寂。二人は並んでベンチに座る。）

女（囁くように）「ねえ……あなたが、私を思い出さなくてもいいの。でも——」

男「でも？」

女「私が、あなたを忘れなかったことだけは、ここに残っていてほしい。」

（男は返事をしない。かわりに、鍵を胸に押し当てる。）

男「……これが証拠ですね。」

女「ええ。」

（遠くで列車の気配が通り過ぎる。風のような、記憶のような音。ガタンゴトン……ガタンゴトン……。）

男「行くんですか。」

女「ええ。でも、どこにも行かないの。」

男「……それは、帰ってくるということですね。」

女「そうかもしれない……この鍵で開けてみたら？」

男「開く場所が分からない。」

女「どこにも鍵穴がないなら、自分の中にあるのかもしれないわ。」

（間。）

男「もし開けたら？」

女「“待っていた時間”が、通り過ぎる。」

（短い沈黙。男、鍵を受け取る。）

男「……聞こえますか。」

女「何を？」

男「音がします。遠くで、車輪が回るような音。」

女「何も聞こえないわ。」

男「見えない列車ですよ。ずっと、ここを通ってた。」

女「誰も気づかなかったのね。」

男「気づかない方が楽だから。」

（沈黙。舞台奥から、低くうなるような鉄の響き。ゴォーン……。照明がわずかに明滅する。風はないが、空気が震える。女と男の髪が少し動く。）

女「……いま、通った？」

男「ええ。見えないけれど、通りました。」

（長い沈黙。列車の音が遠ざかる。残るのは呼吸の音だけ。）

女「あの子、乗れたかしら。」

男「乗ったと思います。」

女「あなたは？」

男「私は、見送る方です。」

女「私は？」

男「あなたは——ここを残す人。」

（女、静かに頷き、立ち上がる。）

（男もベンチから立ち上がり。二人、しばらく無言で前を見つめる。列車の残響が、まだ耳の奥に残る。キーン……。）

（女、わずかに微笑む。）

「待ち人此処に在らず」

（沈黙。光が静かに落ちていく。ベンチだけが照らされ、まるでそこに“誰か”がまだ座っているように見える。）

第四場 帰る場所

舞台は同じベンチ。

照明はやわらかい白。

音はない。

空気が、ほとんど静止している。

ベンチには女がひとり。

膝の上には、鍵。

その金属は、もう冷たくない。

清掃員が現れる。うつむいたまま、床をなぞるようにモップを動かす。ゴ

ト……ゴト……。

女、しばらく清掃員を見つめる。

女「……静かね。まるで、音が寝ているみたい。」

(清掃員、目を上げずに小さく息を吐く。)

清掃員「寝てるんですよ。音はいつも、誰かの気配を待つて……眠ったふりをしている。」

女「ふり……?」

清掃員「ええ。本当は、起きています。でも“帰る人”が来ないと、音は姿を隠すんです。」

(女、少しだけ笑う。)

女「あなた、ずっとここにいたのね。」

清掃員「ええ。ここは……“誰かが帰ってくる可能性を掃く場所”ですから。」

(ゆっくりとベンチに近づき、足元を掃く。ゴト……ゴト……。)

清掃員「誰も帰らなくても、戻るべき影が道に迷わないように……線を引いているだけですよ。」

女「線……?」

清掃員「ええ。影は、見えない線を辿って帰ってくる。線が消えると、帰り道がなくなる。」

(女、胸の鍵に触れる。)

女「……あの人は、もう行ってしまったのかしら。それとも、戻る道を見つけられないのかしら。」

(清掃員、少しだけ動きを止める。モップの先で床を“触れるように”押さえる。)

清掃員「行った人は、行った先の風に溶けます。帰らない人は、“ここに
残した影”だけを置いていく。」

女「影……残っているのね。」

清掃員「あなたの影も。昨日より、軽くなっています。」

(女、微かに眉を寄せる。)

女「軽く……?」

清掃員「ええ。“誰かを許した影”は、必ず軽くなるんです。」

(女、ゆっくりと息を吐く。)

女「“待つ”って……誰かのためじゃなくて、時間の中に自分の居場所
を作ることだったのよね。」

清掃員「そして、居場所ができたときに初めて、人は“帰る場所”を持て
る。」

(鍵を手のひらにのせる女。)

女「この小さな金属の中に……どれだけの音が閉じこめられてるのかし
ら。」

(女、鍵を軽く鳴らす。チリーン……。)

女「重たいのに……手放せない。」

清掃員「重さは、“名前のない約束”です。約束は手放せません。手放せ
るのは、言葉だけですから。」

(女、清掃員の言葉に目を伏せる。)

清掃員「ここ、まだ使えますよ。」

女「ええ。ここで、誰かが座って……誰かが立ち去って……その温度が、
まだ残っている。」

清掃員「何か、残しますか。」

女「……いいえ。もう、残ってるから。」

(清掃員、静かに頷く。)

(清掃員、モップを静かに立て、女に一礼すると去る。しばらくして駅員
が現れる)

駅員「ここは、静かでいいですね。」

女「ええ。静かで、苦しくて……でも、やさしい。」

駅員「あなたはここに残ると思っていました。」

女「残りたかったのかもしれない。でも、残り続けるのは……待ち続け
るのとは、少し違う気がしたの。」

(間)

駅員「待つことは、立ち止まることではありません。立ち留まっているように見えるだけです。」

女「ええ。あの子も、そうだった。」

駅員「鍵は……軽くなりましたか。」

女「変わらない。でも、腕が慣れたみたい。」

駅員「それは、あなたの場所ができた。ということです。」

女「この場所に……？」

駅員「いいえ。あなたの中に。」

（沈黙）

（女が立ち上がる。）

女「……そうか……そうだったのね。なら、そろそろ前に進まなきゃね

……ありがとう。」

（駅員、わずかに制帽のつばに触れる。女が去っていく。）

（間。）

（駅員、手帳を開き、何かを書きつける。）

駅員「……今日も、時刻通りでした。」

（ページをめくる音。沈黙。）

駅員「乗客、ゼロ。発車も、到着もなし。けれど……座席ひとつ分の温もりが、残っていました。」

（ベンチを見つめ、そっと手をかざす。）

（ふと、気配。風が吹かないのに、鍵が微かに鳴る。チリーン……。駅員、動きを止める。ゆつくりと視線をベンチの右側へ。少女が、そこに立っている。）

少女「……まだ、書いてるの？」

駅員「ええ。これが私の役目です。」

少女「役目って、終わることはあるの？」

駅員「終わりは、来ません。でも、移ろうことはあります。」

（少女、ベンチにそっと触れる。座らない。）

少女「ここ、まだ暖かい。」

駅員「誰かが、ここに“いた”からです。」

少女「わたしも？」

駅員「あなたも。」

（間）

少女「ねえ……わたし、もう待たなくていい？」

駅員「待つかどうかは、あなたが決めることです。でも——」

（ゆっくり少女を見る）

駅員「ここは、あなたの帰る場所でもあります。」

（少女、静かに息を吸う。）

少女「じゃあ……もう少しだけ。ここに、いる。」

駅員（微笑む）「ええ。それだけで、充分です。」

（少女、ベンチに座る。座り方は軽い。）

少女「……ただいま。」

（駅員、少女の隣に座る。）

駅員「……おかえり。」

（二人とも前を見つめたまま静止。風が、ようやく通る。鍵が静かに響く。

ヒュー……ヒュー……。チリーン……。チリーン……。

照明が少女と駅員の姿を透かし、やがて、光に溶けるのではなく――ベンチの影の中へ、呼吸のように沈む。

（音楽）

（暗転。）

――終。